三川爆発は計画的殺人だ
人命尊重第一のソ連
CO患者ソ連療養団座談会

ソ連より招待された三池のCO中毒患者療養団は、八月七日横浜を出港し、ナホトカ、ハバロスクを経て、八月十日にモスクワに到着し十四日まで滞在し、十四日より九月四日までソチのカフカスヤリベエラー・サナトリウムで療養をした。帰途ドニエツクのドンパス炭坑を見学し、九月十七日大牟田に帰着した。九月二一日、療養者の方々に三川支部に集っていただき、ソ連での療養の模様、炭鉱見学の模様などについて語ってもらった。

【出席者】野中敞（若葉）井上次光（かえで）緒方務（大谷）坂田俊昭（宮前）萩島光章（二小）菊川格次（新港）中村俊夫（新港）吉田頼義（野添）佐藤寿（銀水）橋本博章（執行部）中島宗斗（〃）

（写真は九月二十一日大牟田駅での帰山歓迎集会）

三池でも療養設備を

司会　みなさんごくろうさまでした。今日はソ連でいろんな治療を受けてこられた模様をお聞きしたいのですが、まずモスクワについて感じたことから聞かせて下さい。

E　まずハバロスクからナホトカまで汽車で行きましたが、日本のように一等とか二等などなくて寝台も日本のより広い。

F　一車輌に女の車掌さんが二人が交替で仕事をしている。

D　夜モスクワについたが、日本のようにキラビヤかなネオンなどはあまりなく、本当に必要なネオンがあるだけで静かだった。

J　私たちが泊ったレニングラツカヤホテルは一室に二人づつで一流ホテルだった。

A　モスクワについてまず全員全ソ連労仂組合病院で検身を受けた。ここの病院は、日本の診療所と保険所を合併したようなものでちょっとでも病気にかかるとここで診断をしいろんな検査をしたのち入院の要あるものは各病院に送っている。国民の健康管理と診断をするのが任務になっている。

ソチでの療養生活

司会　その後ソチに行かれたわけですが、ソチでの療養生活はどうでしたか。

I　食事は栄養食で、生活の心配しないでのんびりしたのでみんなふとり、よくなるようだ。

A　ソチは町全体が療養地になっていて、五〇の療養所がある。病気の者、健康の者といろんな人がきているが、病気の方が金はあまりいらないが、一ケ月で日本円で一万五千円～五万円位の費用で暮らせる。ソ連全体としてはまだ療養所が足りなくて、現在九〇人に一人位の順番でまわってくるので、療養所の建設中である。

H　ソチのサナトリユウムに着いてすぐまた全員検査した。私たちが接したお医者さんは全部女医さんばかりだった。ソ連はどこでも女でできる仕事は女でやっている。

I　朝食をするとき食堂に毎日まわってきて、今日の身体の具合はどうですかときいてどこでも悪いときはすぐ診察して治療する。

C　胃・かぜ・高血圧などの治療をやってもらったが、日本と治療の仕方が違うようだ。電気治療が多い。

D　私たちの治療は、電気療法の他に、シャワアーと入浴治療があった。特殊なシャワアー装置で全身をマッサージしたように気持がよかった。

J　松の実を粉末にしたのを、三七度位の湯にとかし、毎日十分位入浴した。

I　医学的にはくわしくは判らないが、効果があったと思う。永続的にやればよいと思った。こちらでも要求して設備を作ってほしい。

三池でソ連の設備があったら
命を守る斗いに結集しよう！

司会　ではドンパス炭鉱を見学されたわけですが、三池にくらべてどうでしたか。

A　私たちが行ったのは、ドンパス炭田のクロレタルスカヤ・グルボカヤ炭坑に下りました。ひとくちにいって、絶対ケガをしないように保安設備がされているということです。坑口から二〇分位歩いて払まで行きましたが、床は板張り、天井は鉄のアーチワクがあり、なり木ですきまなく張ってあるので小石一つも落ちないようになっている。道中と払には一メートルおきに螢光灯がつき安全灯の必要がない位だ。安全灯はアルカリ電池で日本の安全灯の二分の一の重さ。それに日本では入坑するときは、マッチやタバコをもっていないかと調べるが、ソ連では、安全灯と防毒マスクをもっていないと下げない。ここでもいかに人命を尊重するかが判る。

G　ここの炭坑は坑内一、二〇〇人、坑外二〇〇人位の炭坑だが出炭は三、三〇〇トン、一日人当り二・五トンと三池の労仂強化とはくらべものにならない。

F　坑外に指令室があり、機械のランプ信号で一目で坑内の状況が判り、坑内温度を一八～二〇度に保ち、ガスが出たら指令室から自動的に空気の入れかえが出来るまた坑内では無線で連絡をとり合っている。三池の災害のときせめてこの無線なりとあったらもっと被害は少かっただろうと思った。

J　坑内のメタンガスを坑外に吸い上げて家庭用の燃料に使っている。

B　風呂はシャワアーで、脱衣箱はドロボーの心配などないので戸はついてない。

E　炭鉱についている医療設備はととのっている。

うらやましい救護設備

司会　ソ連での災害に対する、救護隊の活動の状況を聞かせて下さい。

A　ソ連では人命尊重がいかに重要視されているかにおどろくほどだった。炭坑では、日本でいうなら企業別位に保安研究所というのをもっていて、十部門位に分れて、炭坑災害の万一に備えて研究している。その研究所だけで一つの町ができている。

救護隊は中央本部が六〇〇人、本部が六個部隊、四〇小隊が、一班二四人に別れて、三交替で常駐している。救護自動車は一小隊に五台、大型トラック二台、救急車二台が運転手と共に常に待機している。この救護隊員になるのはソ連市民として非常に名誉ある仕事となっている。待機期間中は訓練学習が続けられている。炭坑で事故があったら出動非常サイレンがなり、現場までに一五分～二〇分で到着する。三川の大爆発のときは九時間もかかってようやく救護隊がとどいたのとくらべると、三井鉱山は計画的に殺人をやったのだといえる。炭坑だけでなくソ連ではどこででも命を大切にしている。

司会　ソ連でその他特に印象に残ったことは何ですか。

A　日本とは逆に炭坑労仂者が一番賃金が高く、大学の先生の日本円になおして八万円～一〇万円にくらべて、採炭・掘進で一二～一七万位の賃金だ。それに坑内は五〇才で停年だが停年後は過去の給料の五五％が政府から保証される。

C　住宅は一人当五坪が与えられる。物価は日常の生活必需品は日本と変らないがぜいたく品は日本の三～四倍するようだ。それに耺場では耺制のいない生活は日本では考えられぬほど民主的だ。

司会　ソ連のうらやましいほどの状況を聞かせていただきありがとうございました。私たちも生命を守り、生活を守るため一日も早くソ連のような社会となるようがんばりましょう。

三池主婦会主催
玉名で敬老会

三池斗争後の三井鉱山の不当な差別切崩しへの抵抗斗争の中で、低賃金による家計費を補うため主婦会員のほとんどが内耺に出ています。その留守家庭でいろいろご協力いただいている老人の方に、例年通り敬老会を催し、三池主婦会として感謝の意をこめて慰労することになりました。

当日は演芸など多彩な催しが予定されている。

とき　十月十五日（荒尾地区）
〃　十六日（大牟田地区）
ところ　玉名保養センター
時間　十一時開会

「プラウダ」記者三池を訪れる
三池の斗いをこの目でみたい

九月二六日、ソ連「プラウダ」記者のフセワロード・オフチンニコフ東京支局長は、福岡市での第一インター記念祭の講演に先だって一日早く、「三池の斗い」を膚身で深く知りたいという希望で、三池労組を訪れた。

一日の訪問だったが、午前中に執行部から三池の現状などについての説明ののち、午後より、訪ソ療養団との座談会、天領病院のCO中毒入院患者との懇談会、三川支部に於て、昇坑後の一番方との懇談会後、小浜社宅で組合員、主婦会員との座談会ののち、オフチンニコフさんの三池労仂者の生活をみたいという強い希望で、三川支部の木村さん宅を訪問、最後に本館座り込み中の遺族を激励し午後八時まで熱心に三池労仂者と話合った。

オフチンニコフさんは、ソ連では三池労仂者をよく知っている。皆さんに逢えてうれしいと語った。

三川で婦人部生花を見るオフチンニコフさん

連載小説
音
―みいけ大変災のなかから―
加藤説夫

(3)

午後六時すぎでもう煙は殆ど出ていなかった。荻村たちは二班（一班五名）の先発救護隊と一緒だった。

十一度四十分の傾斜で、地底にふかぶかとつづく、不気味な暗黒の空洞に足をふみこんだ。永年通いつづけて、知りすぎるほど知っている第二斜坑だが、いまの荻村には感懐があった。三池闘争で敗れて以来、三川鉱と目と鼻の位置にありながら、構内に立入りを拒否されて、まる三年ぶりの入坑である。変災によってその障壁が除去されるという、皮肉なめぐりあわせを苦笑する心のゆとりはなかったが、この重大な場合に、第二組合の役員がただのひとりも馳けつけて来ないことについては、軽べつよりもむしろ憤りを感じないではいられなかった。

二目抜あたりから、予期した天盤の崩落があり、足場がひどく悪くなったが、さらにすすむと、爆風のためか、二十四インチの巨大な排水管が爆発して食いちがっており、そこからすさまじい勢いで排水が逆流したとみえて、車道の床を二尺も洗いながしていて、帽灯の光りにみる足許は全く危く、一足一足をたしかめながら下りるより他はない。誰ものをいわない。帽灯の光の限のなかに、前を行く人の背を捉えながら、風量四千三百というつめたい入気の風に背をふかれて、ひたすらに闇の底におりる。

坑底の人車乗場から百五十米ほど上と思われるあたりで、まず傾斜の途中に停止した人車が見えてきた。（捲きあげられる途中で停電にあい、そのまま停止したのだろう）と思い、何気なく人車に近づいて、荻村はハッと足をとめた人である。それも帽灯の限の中にうかびあがったものだけで、三つ四つ、五つ、しかも頬の半分をボタに埋めたり、頭を下方にむけて枕木にひっかかったり、車輪に足をつっこんだりー。どこにも力の充実を感じさせないその姿勢は、確かめるまでもなく、生きているものの姿態ではなかった。それを見た瞬間、すでに思考機能が硬直したのか、誰もものをいわず、しばらくは動こうとしなかった。

しかし、ここはまだ事件の入口にすぎなかったのである。荻村たちは、ジグザグに脱線した人車の両側を点検しながら、まだ脈はくのある個体をいくつか発見した。助かるかどうかは判らなくとも、息ある限り手をつくしてみなければーという気持は、みな同じであった。遺体は帽灯の番号や持物をメモして、そのまま残し、息のあるものは二人一組になって抱え、坑底の安全な場所にあつめた。失神している人間はひどく重かった。そして水にぬれ、泥に汚れたために扱いにくく、そのうえ足場が決まらない坂道なので、大へんであった。なんべんも坂を下り、上りしているうちに身体は泥に汚れ、へとへとに疲れた。それでもそこの被災者の始末がつくまでは、その作業をくり返さねばならなかった。

荻村は、かくもたくさんの仲間を、かくも無惨に殺してしまった会社側の労務政策のあり方に、胸が煮えかえるようないかりを感じた。（いつの日か、きっとこの仇はうってやるからなあ、かんべんしてくれよ）と、心のなかでくり返しながら、ぐにゃぐにゃと、すっかり心もとなくなった遺体を、ゆすりあげゆすりあげ、闇の坑道をよろめき歩いた。

生存者が三十名余、遺体はメモとっただけでも四十いくつかあった。荻村たちは、そこでの作業を終ると、一度昇坑することにした。事故は坑外で予想していたのよりケタ違いに大きく、殉耺者の数も想像もつかぬほど多いのではないかという気がして、とにかく組合長に報告して、事後のことを話合ってみなければーと考えたのである。

3

西脇正彦は三五〇米坑道一六目抜の詰所で、昇坑するための着替えをすませたばかりのところであった。何の前触れもなく、突然電灯が消えた。現場は三川坑内でももっとも奥まったところで、そこまでは、爆発音も、閃光もとどかなかったのである。

内電の西脇たち（五名いた）は、いやな気がした。停電が坑内の一部の電気関係の故障であったら、居残って修理しなければならないかもしれなかったからである。停電の規模をしるために、S係員がすぐ坑内変電所に電話をかけようとしたが、電話は全く通じなかった。全面停電である。しばらく待機して、再び電話の信号をいれたが、応答はなかった。

西脇たちは、何かの事態を予想して心配するよりも、昇坑の時間がおくれることが、その際不愉快であった。とにかく、もう二番方が繰込む時間だし、故障の修復作業は二番方にやってもらうことにして、西脇たちは詰所をでた。人車が動かなければ歩いて昇坑するより他ないが、歩けば坑口まで四キロあった。

電灯が消えた坑道は、全く勝手がちがい、距離感がにぶって、いやに遠く感ぜられた。暗さと不安が、人々を無口にした。三六昇のループ線のあたりで、先頭のS係員が、

「おい、煙りが流れてくるよ」

といってたちどまった。煙りはすぐ西脇たちをつつみ、流れつづけた。赤錆色の煙りであった。

「エア管が爆発したったい」

誰かが、こともなげにいった。

エア管が爆発すると、管のなかの赤錆が空気にまじって、赤い煙状の流気体になることは、誰でもよくしっていたので、誰もそれに異議はいわなかった。

（さしえ・村山　敏美）

主婦会十二年
(8)

同志と共に運動の第一歩を

五島頼子

労仂金庫への認識

六三日の長い闘いの結果として中労委は七％の賃上げと、一時金五、〇〇〇円のあっせん案を出しました。賃下げ提案で押し切ろうとした会社に対して、わずかではあっても賃上げを認めさせたことは、なんといっても労仂者の団結の力であったし、そういった力をお互いが持っているということを改めて認識したことは、私たちの大きな前進でもありました。

やがて二十八年の新年を迎えましたが、地域婦人部としてはスト中から「正月返上で闘い抜こう」という線を打ち出していましたので、スト妥結は致しましたが、緑ガ丘連合地域ではきわめて質素な自粛した正月でモチをついてもごくわずかですし、中にはモチをつかなかった家庭も多かったと思います。

そして二十八年の一月、私たちはこの闘いの中で一番の支えになったことは、生活資金を貸し出してくれた労仂金庫の力強さでした。今後も台所を守っていくためには労仂金庫を育成することが、もっとも緊急なことであるし、そのためには例え十円でも預金をするということが大切だと思ったのです。

しかし一般の主婦にそのことを徹底させるためには、まず労仂金庫について詳しい情宣が必要だと役員会議の話し合いで三川支部に相談にいきました。教宣部では「六三日もストした後で、みんな生活に困っている今、労仂金庫の話しをしても、果して預金する人があるだろうか」と心配されました。しかしこんな時期だからこそ次に備えて、ということで理解も早いのではないかとさらに要請をして、労仂金庫から伊藤さんに話しにきてもらったのです。

当時の労仂金庫大牟田支店は、現在の労仂会館の食堂横のせまい一間を借りて、支店長と伊藤さんたちで細々と開店されたばかりの状態でした。パンフレットを持参された伊藤さんから、小鳩町の班長さんたちは熱心に話しを聞き、質問も大分出ましたが、その後の給料日からは小鳩町一二〇軒くらいの中から、なんと一〇五軒の預金者がありました。家族会の人たちももちろん加入され、りっぱな通帳が渡されました。各班ごとに班長さんを通じて、ここにはじめて労仂金庫の一〇〇円貯金が実現したのです。これを皮切りとして緑ガ丘全地域に拡まりました。

はじめて
炭労大会傍聴へ

このような活動を続けているうちに、二月初旬のある日突然、三川の酒井支部長と東口さんの訪問を受けました。酒井支部長とはスト中花慰問に行ったきり、あまり話しをしたこともありませんので何ごとかとおどろきましたが、話し出されたことは「今度、二月二十六日から伊豆の伊東で炭労大会がある。炭労としては、家族の代表をはじめて傍聴させることになった。三池からも一名代表を出すことになって、私は五島さんを本部会議に推せんしてきた。ぜひ行ってください」とのことです。

実際寝耳に水とは、このことでしょうか。六人もの子どもをかかえて、婦人部の仕事すらロクにできない私には、とてもそんなむづかしそうな大会へ出かける勇気はありません。そしてまた経済的にも、オイソレと出かけられる状態ではなかったのです。しかもわざわざ一名代表として出席するからには、なにか目的がなければならない。それはどういうことであろう。頭の中でまとまりもつかないまま、一応主人と相談をしてお断りしようと思いましたが、一しょにこられた東口さんからも「ぜひ行ってください。酒井さんも行かれるので心配はいりませんよ。家のことは私がお手伝いします」とはげまされて、ついにおこがましくも炭労大会の傍聴に出していただく決心をしたのです。

しかし決心はしたものの、どういう用意をしていけばよいのか、皆目見当もつきません。第一、着ていくものがない。旅費がない。引揚者の私にはなにもないのです引揚者のみんなが経験したように裸一貫なのです。私は同志として東口さんにかくさず話しをしました。強くうなづいた東口さんは、自分の家から大きなトランクに一抱えほども着物を入れて、かついでこられました。長襦絆から帯羽織に至るまで、一切のものを貸してもらったのです。（このごろは上京するときに身軽な洋服で、下着を二、三枚もって、山元会議の延長のようにして出かけるのとは大違いです）しかも現金一万円を縫い込んだ腰紐まで用意して「小出しの金はここに入れて、大金は腰にまいて」と事細かな注意です。感謝する私に東口さんは「五島さんは頭と中味だけもって行けばよい。私の家にある物は、なんでも使ってほしい」といわれたのです。

（次号へつづく）

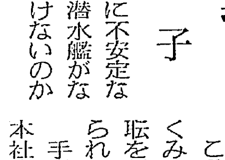
内職と主婦会活動

港務支部　大本君子

私たちは今外に出られない者ばかりでグループを作り、時計バンドの内耺をやっています。それがいつも期限つきで、毎日追われつぱなしで、私の大好きな読書どころか、新聞読む暇さえないしまつ。だから夜フトンの中に入ってねむい目をこすりこすり、新聞の大きな活字だけをひろい読みするだけが精いっぱいなのです。果してこれでよいのだろうかといつも考えます

このごろは、毎日南ベトナム問題、原子力潜水艦の日本寄港問題など大きな活字がのってくる。しかし新聞だけでは、南ベトナムがなぜあんなに不安定なのかあるいは原子力潜水艦がなぜ日本に寄ってはいけないのかわからない。

先日原潜問題の学習会に行きました。



そして原子力潜水艦が絶対安全でないこともわかったし、南ベトナムとの関連性、政府が日本寄港を承認した理由などおどろくべき事実が判りました。

でも家へ帰ったら、内耺を明朝までに仕上げるためにどうしても夜中の一時、二時位までおきていなければならない。

こういうふうに、私だけでなくみんなの人が主婦会活動と内耺をどう結びつけるか悩んでおられることだろう。

手近かな問題として、遺族の本社座り込みのことにしてもいろいろの問題がでた。「子供がいるから行けない」「三番方をもう少し早く帰してもらって内耺に行けるようにしてほしい」など。しかしこれも班会議の中で、みんなで話し合い、今の情勢を理解して解決した。そして座り込みに行ったほとんどの人が「本当に行ってよかった」。一日位仕事を休んでも座り込みに行くことがどんなに重要なことか判りました」といっておられる。

こうして行動することによって、あるいは斗うことによって一歩一歩前進しておられる姿は本当に美しくたのもしい。

私も負けてはいられない。仲間と一緒に前進するためには、もっともっと勉強しなければ。そのためには、学習会やいろんな集会にはぜひ出席したい。

内耺を、内耺のための内耺でなく、斗いの手段にするためにはどうすればよいか、よく考え反省したいと思います。そして一日も早く、私たちがつらい内耺に追われる生活をなくしてすむような、新しい社会がきたらと思うのです。

CO患者見舞
盆栽、金魚を贈る
本所盆栽金魚サークル

三川大爆発による入院患者全員に対し、盆栽や金魚を贈り慰め励まし一日も早く全快してもらおうと、本所支部盆栽金魚サークルの皆さんが中心となり、地域の仲間の応援をえて去る九月一九・二〇日の両日、臼井地域広場に於て「盆栽と金魚の展示会」を開いた。

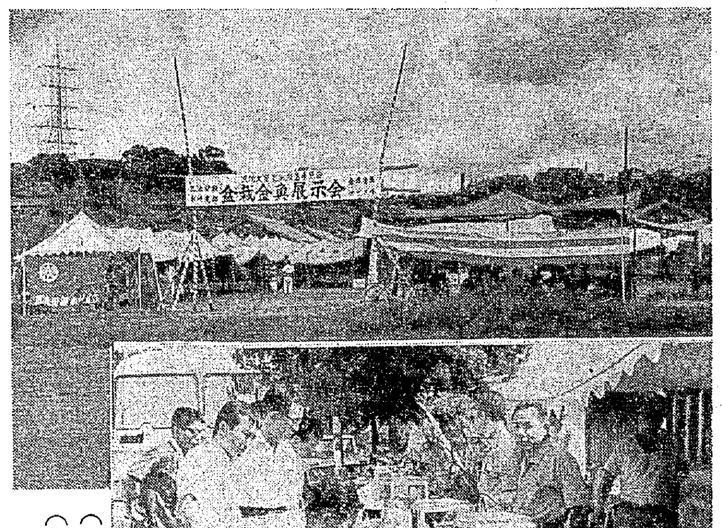
このことは昨年あの爆発後すでに一年にもなろうとしているのにいまだに快復の見とうしもたたず病床に苦ぎんしている同志を励まし慰さめ、この友を生涯補償させることや、会社が責任をとって今後絶対災害をおこさないこと、および人命尊重を強く要求しさらには世論的、社会的なものにするため開かれたものです。

会場には日ごろから、たん精こめた、逸品珍品約四百点が展示され組合員家族はもちろん市民一般の多数の参加をみ、賞さんをあびた。

とくに三百メもある黒獅子やランチュウ、百年にもなる老松掌にのる小盆栽など人気を集めた。

展示会後早速労災病院や天領本院などに斗病生活中の仲間に贈られ、新鮮ない吹きを枕元に送りこんでいる。

なおサークルとしてはこの行事を成功させるために春三月ごろより計画され、資金の一部にカンパを訴えた。当日カンパや坑口カンパ地域カンパは一万八千円にものぼり、サークルではこれらのご協力に対し心からお礼申し上げるとともにさらに自信をもって今後の活動を発展させるといっています


盆栽金魚展示会
三川鉱大爆発
ガス患入院者見舞資金カンパ
（上）臼井展示会場
（下）於三川支部坑口でカンパ活動